昭和四二年一〇月

わが国における「盲聾唖」教育の現状

―米国パーキンス盲学校長等一行の来日に際して―

文部省初等中等教育局特殊教育課

わが国における「盲聾唖」教育の現状

一　パーキンス・盲学校について

アメリカのパーキンス・スクールといえば盲聾唖教育を思うほど、日本でもこの名を知る人が最近多くなつている。しかしまだ、盲聾唖教育については、社会の関心がうすいのが実状である。

今から一三五年前にマサチューセッツに建てられた私立の盲学校がパーキンス・スクールで、この学校の歴史と伝統は盲教育の手本として世界の注目をあつめている。一八八三年に盲聾児のローラ・ブリッジマンがパーキンスに入学、医師のハウ博士が個人指導に当たり、一八八七年にヘレン・ケラーが六歳のとき、サリバン先生が、このパーキンスから派遣されたこと等は、ヘレン・ケラーの自伝に詳しい。パーキンス盲学校にDeaf and Blindの学部が創設されたのは一九三二年のことである。盲聾部は現在、四歳から二〇歳までの視覚と聴覚に障害をもつ幼児・児童・生徒が入学している。学校の組織は、学校部・研究部・教員養成部に分れる。学校部には、生徒二人に一人の教師が専任であり、その他、主任の教師が教室を巡回し、指導にあたる。研究部は障害の判別・教育課程の適応の問題、

聾唖児として入学した。主として東京大学梅津八三先生の助言と、同校教諭の志村太喜弥氏の連携と指導により、わが国の盲聾唖教育が創始されたのであるが、今日に至るまでの経緯には、なみなみならない苦難の歳月があつた。なお、盲聾唖児について最初に発見し、この教育の必要性を説いたのは、東北大学教授堀江貞尚氏（昭和二四年当時山梨聾学校長）であつた。

その後、昭和二六年五月の中旬に、東京盲学校長松野憲治、東京聾学校長川本宇之介、山梨県立盲学校長三上鷹磨および文部省担当官の間で盲聾唖児教育の方針が決定せられ、以来十数年の歳月の間に、昭和三七年には山梨県立盲学校長は丸茂清丈氏に変わり、また松野氏、川本氏は逝去され、昭和二七年当時発足した東大梅津八三氏、三木安正氏、中島昭美氏等の心理学教室のグループ、また同じく、東京教育大学尾島碩心氏、東京芸大桜林仁氏等の心理学関係者も参画して、盲聾唖教育研究会が発足してから、真摯な研究が続けられ、その後、昭和三六年に、山梨県立盲学校が盲聾唖児の文部省指定実験学校に指定されるに及んで、新しく実験学校としての公的な性格に移された。以来山梨県教育委員会の積極的な援助と同校校長、同校志村教諭、寮母清水ふじ江氏等の苦難にみちたこの子等の

幼児の観察等の実験研究等が主体である。

学校部は週五日制で、午前九時より午後三時ごろまでの授業で、集団学習よりも個別指導を原則とした言語訓練、生活訓練の治療教育であることは言うまでもないが、教室があり、学級がある。そして生徒の特性に即して、たとえば料理、水泳、工芸等豊かな生活指導等も組まれている。教員養成部は、ボストン大学との提携によつて生まれた。特色としては年間を通じて、午前は、原則として、学校部で盲聾児と学校生活を共にし、観察実習を行ない、午後は講義、セミナー等で所定の単位を履習するという教員養成の組織である。こうした盲聾児の観察実習と並行して研究と講義が行なわれるというところに、パーキンスの特色がある。

現在のパーキンス盲学校長はウオーターハウス博士で、盲聾部の教師は一九人、付き添い一四人、生徒数約三六人、教員養成部の学生は、米人女子学生数名のほか、海外よりの留学生を含めて計一〇名程度である。

二　わが国における盲聾唖教育

T・A児は昭和二五年、S・Y児は昭和二六年、K・M児は昭和三五年に、山梨県立盲学校に盲

教育の歳月の歩みがあつた。昭和三八年九月には、高松宮御夫妻が山梨県立盲学校に盲聾唖児教育を視察される等のことがあり、また最近、昭和四〇年三月には、ウオーターハウス博士が来日、文部省において、衆参議員、学識経験者、現職教員等を招いてパーキンス盲学校での製作映画である「静かな夜の子どもたち」という、パーキンスにおける二カ年にわたるドキュメンタリーフイルムを試写してパーキンスの内容を紹介された。これは盲聾唖児がどのようにして、指先きを通して、会話を触知し、また発音して話しことばを覚えていくかという記録であつた。ウオーターハウス博士は昭和四一年夏ふたたび来朝、「アメリカのパーキンスでは、日本で盲聾唖教育に携わり、またこの道に励もうとする教員を受け入れる準備があること、また昭和四二年にはアメリカより盲聾唖児教育視察団を日本に派遣すること」を文部大臣に申し入れる等のことがあり、わが国の盲聾唖児教育も新しい国際的視野に立つ段階を迎えようとしている。わが国には、これまで相当程度実態が明らかな盲聾唖児と思われる者の数はすでに十数名発見されている。しかし、正確には、文部省が今年行なつている特殊児童の実態調査の結果をまたなければ、特に教育可能な盲聾唖児などの範囲か、また障害の状態は盲聾唖児と称しても、盲・聾のほかにどのような

障害が重複しているか等の実態は明らかにされないので、いまだ正確な盲聾唖教育の対象児が把握されているとはいえない。

三　実験教育の成果について

昭和三六年度の山梨県立盲学校における文部省の指定実験の主題は、「盲聾唖教育の研究」であり、昭和三七年度の続いての主題は「盲聾唖教育における算数指導」であつた。

実験研究の内容の一部を省察すると、盲児は聴覚と触覚によつて外界に適応し、聾児は主として視覚によつて外界に適応するものであろうが、これに対して盲聾唖児は触覚を中心とする視聴覚以外の残存感覚によつて外界に適応するので、残存感覚としては、触覚のほかに、圧覚、振動感覚、嗅覚、味覚などがあげられている。

しかし、盲聾唖の世界というものは盲でもなく聾でもなく、盲の世界に聾の世界を加えたという単純な世界でもなく、盲聾唖の特殊な世界でなくてはならない。そこで盲聾唖児の特性をつかむには、その感情表現、要求表現、睡眠、食事、洗面、用便、歩行、遊び等にわたる日常生活の行動観察を通じながら、昼夜を通じて生活訓練、言語訓練が山梨県立盲学校において十数年継続されたのである。基本的習慣づけに始まり、点字触読弁別の導入

から言語概念の獲得へ、さらに点字単語学習、点字書き学習へと進み、言語訓練には、まず発声導入の基礎としての動機づけとして、振動感覚の訓練、振動弁別の学習、触話弁別の学習、触画学習へと進んだのである。そして発語については口形の構成にも、口形紙を工夫しての弁別訓練、呼吸調整の自覚にも、ふくらましたものと、しぼんだものを創作しての弁別や、声の出し方を知らせる前段階として、のどの振動やのどの緊張を知らせるために、まず、やわらかいものと固いものの弁別などから、のどを触知して声を出す場合の仕方を知らせる等の苦心した方法がとられたのである。そして、これらを通じて最終的には人と人とのコミュニケーションの仕方を知らせるとともに、何よりもこの子らにとつて大切な自主的な生活訓練へと導いていくという方法がとられた。

こうしたことは、特殊児童のすべてにおいて、たとえば聾学校等の言語指導でも、まず生活習慣の確立、感覚訓練による弁別の指導、言語意識の確立から発音誘導、発語導入へと進む道すじが大切で、このことは基本的には、異なるものではない。ただ、盲聾唖児の教育には、それぞれの道程が困難に満ち、特別に創意と子供に即した工夫が必要である。言語というコミュニケーションの手段を獲得するには、いかに人間はすべての感覚を動員

し、それが正しい道すじとステップを踏んで日常生活の経験と生活化の中から進めていかなければならないものであるかを、この教育は教えている。

算数という抽象化の段階でも言語指導と並行して導かれねばならない。すなわち、点字触読弁別が可能になつて、単語触読（点字と物との結合）から、更に、単文触読、文章触読へと進んだ。この過程において、すなわち点字触読の能力が進むにつれて、点字数字を用いて算数学習が始められたのである。

言語の認識ができてから具体物の操作を何度もくり返し、やがて具体物の操作を省略して、一から五までの加法・減法がわかるまでに数年を要した。こうした実験学校の成果は、昭和三八年に山梨県教育委員会の主催による実験学校研究発表会で報告されたが、社会の認識も一部の人々にとどまり、この教育に対する教育界の関心をひくまでには、まだ至つていないようである。

四　重複障害教育の研究推進

現に、山梨県立盲学校では、「盲学校における重複障害教育の管理運営および盲聾唖児の指導計画に関する研究」が文部省指定実験学校の研究課題として委嘱され、昭和三八年より継続研究されている。また別に、京都府立盲学校においては、盲精薄児を対象として、「対象児の判別と学級の管理」を課題として、

昭和三九年度より文部省実験学校として継続されている。

また栃木県立聾学校では、聾精薄児を対象として昭和三九年度より、「聾精薄児の思考と行動の特性および言語の使用能力について」という研究課題で、文部省実験学校の研究が継続されている。

最近、たとえば、聾学校では入学時における聾児の診断と判別の結果、単に聴覚障害にとどまらず、聾にも戦前と異なつて先天素因による遺伝性の聾でなく、また末梢性の聾のみでなく、言語中枢の障害をも併せ持つもの、あるいはまた、一見して聴覚障害のみでなく自閉症を伴うもの、また、聴覚障害と誤りやすい小児失語症等が増加してきている。もちろん、聾であり精薄である者は多い。特に注意すべきことは、聾精薄児も前述の盲聾唖児と同様に、その教育は聾という障害と精薄という障害をあわせた教育ではないということである。聾精薄児はそのような単純なものでなく、それ自体独自の特性を持つたものである。

そして、特に、これらの重複障害児の言語指導をどうするかは、基本的なこの教育の大きな課題である。広く言語病理学の研究の開拓と並行して、言語障害児の指導の個別化した研究方法の解明や、学級管理のあり方等にも新しい方向が与えられる必要がある。盲聾唖児は対象児の数としてのみについて言えば特に多いものとは思われないが、その他の未開拓な重複障害児教育に対して、わが国特殊教育の先駆をなしたのがこの盲聾唖児の教育である。

五　今後の方向

わが国の盲聾唖教育は、前述した如く、先覚者。関係者の努力によつてその基盤としての研究は着実に伸展しつつあり、その成果は、欧米に比しても、すぐれたものと言い得るが、この教育の充実のためには、今後に残された問題も少くない現状である。とくに、これまでの研究成果によつて、教育内容、方法については、理論的に実証されたものは、さらに教育実践の上に移していくことが当面の課題であるとともに、なお未開拓な分野に対しては、これを早急に解決していくことの必要に迫られている。

とくに、盲聾唖児の教育については、対象児の障害の程度、性質に対して、適正な診断と判別が行なわれ、盲聾唖児に即した有効な教育内容、方法が確立されることがたいせつである。しかし、わが国においては、研究者の研究開拓の成果を教育の場に移す段階において、全国的な体制は未だ確立していない。このため、昭和四十二年度においてもひきつゞき未開拓なこの分野の教育について実験学校を指定して研究を推進するとともに、昭和四十一年度より重複障害教育設備費補助を行ない、また、「就学指導講習会」「教育課程研究集会」

においては、重複障害児をもとりあげて、これが研究を深め、指導の徹底を図つている。

しかし、盲聾唖教育の問題は、ただたんに現場教師の実践研究によつては解決でき難い困難な面があり、この教育の振興のためには関連諸科学による協同研究の成果に、まつところが極めて大きいのである。

そこで、文部省においては、昭和四十二年度において特殊教育総合研究調査会を設けて、専門家、学識経験者を委嘱し、盲聾唖教育をはじめ、特殊教育の各分野の基本的施策のあり方、及び特殊教育総合研究機関の構想について、目下調査検討を進めている。

この調査結果に基づいて、わが国の盲聾唖教育およびその研究体制が確立され、今後、この教育のいつそうの充実と発展が図られる段階を迎えている。

「付」

パーキンス盲学校

米国文化はボストンから始まつたと言いますが、世界的パーキンス盲学校もこのボストンで始まりました。役に立つ社会人を作り出す教育方針のもとにパーキンス盲学校は百三十五年前創立し、盲教育の手本として世界の注目を浴びて来ました。ヘレン・ケラーの学んだのもこの学校であつたのです。

盲児教育さえいまだ認めゆれていなかつた十九世紀の初期に、パーキンス盲学校は盲ろう児ローラ・ブリッジマンの教育を試み、世界で初めて盲ろう教育に成功したのです。実は半世紀後入学したヘレン・ケラーの教育は、このローラ・ブリッジマンを教えた経験に基づいていたと言うことです。

こうしてパーキンス盲学校は盲教育ばかりでなく、更に大きい障害盲ろうに対する教育においても世界の歴史を作つて来たのであります。

ウオーターハウス博士

このたび訪日されたウオーターハウス博士は、パーキンス盲学校五代目の校長で、盲教育の権威であるとともに、世界の盲ろう教育の開発に大きな貢献をしている方です。盲ろうの神様と呼ばれる程に盲ろう児を愛し、その愛には国境も人種差別もありません。見捨てられた盲ろう児の為にはどこまでも尋ねて行くのが博士なのです。「盲ろう児の数は少ない。しかし、たとえひとりの人間でも人間の生命は無限に尊いのである。」とは、よく先生の気持を表わしていると思います。

ロバート・J・スミスダス氏

米国生まれのロバート・スミスダスさん（42）は五才のときにかかつた熱病が原因で盲ろうになりましたが、この致命的障害にも負けず、自己の訓練、勉強に励み、現在はヘレン・ケラーの意志を継いで多くの不幸な人々のお世話をしています。身体障害者の師表として人気をあつめているスミスダスさんは人々からの要求にこたえ、年に二百回位講演をしています。昨年はスミスダスさんの業績を讃えた大統領委員会の表彰がありま

したが、この外に受けた賞を挙げれば数限りありません。

スミスダスさんはヘレン・ケラーと同じパーキンス盲学校で学びましたが、幸いなことにヘレン・ケラーの子供時代にはまだなかつた触話法を習うことができ、再び人と会話ができるようになつたのです。触話法とは、盲ろうの人が相手の顔に手を触れて言葉を読み取る方法ですが、スミスダスさんは指先を通じて相手の言葉のなまりまでも、わかると言うことです。

学歴はセント・ジョーンズ大学を優等で卒業後、さらにニューヨーク大学の修士課程を修了しました。盲ろうで修士号を獲得したのは世界にスミスダスさんが一人だけと言われています。

著書も色々ありますが LIFE AT MY FINGERTIPS は自分の体験を書いたもので、この日本語訳は日本放送出版協会から出版されます。目の見えない、耳の聞こえない存在を認識すると共に、いかなる困難にも雄々しく戦い抜いて行くスミスダスさんの姿に接する時、人間の力を感ぜずにはいられません。

パーキンス盲学校長等一行来日日程

		（宿　　舎）
10月26日（木）		
15：25	ウオーターハウス（校長）、スミスダス、レーマン（秘書） キヤンベル（カメラマン）の4氏ＰＡＩ機羽田着（ホノルル経由）	
15：30	スミス副校長ＮＷ７機羽田着（シアトル経由）	ホテルオークラ
16：30～17：00	２７日の予定打合	
10月27日（金）		
9：00～10：30	１０月３０日以降の日程打合せ	
12：30～14：00	大臣招待昼食会	
14：30～15：30	記者会見	ホテルオークラ
10月28日（土）		
〃	日光見学	日光金谷ホテル
10月29日（日）		ホテルオークラ
10月30日（月）		
12：30～14：00	東京教育大学附属盲学校訪問	
15：00	横浜訓盲院訪問	ホテルオークラ
10月31日（火）		
13：30～15：30	講演会　ヘレエケラー会館　点字毎日主催	ホテルオークラ
11月1日（水）		
	東京宝塚チヤリテーショー	ホテルオークラ
11月2日（木）		
10：00	ウオーターハウス羽田発で帰国	
13：00～15：51	一行「ひかり２５号」で京都へ	京都国際ホテル
11月3日（金）		
10：00～16：00	京都見学　夕刻奈良へ	奈良国際ホテル
11月4日（土）		
10：00～16：00	奈良見学　夕刻大阪へ	大阪国際ホテル
11月5日（日）		
10：00～16：00	大阪見学	大阪国際ホテル
11月6日（月）		
13：30～15：50	講演会　毎日新聞社　点字毎日主催	
11月7日（火）		大阪国際ホテル
9：30～11：30	大阪府立生野聾学校訪問	
14：00～16：30	大阪府立盲学校訪問	大阪国際ホテル
11月8日（水）		
9：30～12：00	日本ライトハウス訪問	大阪国際ホテル
11月9日（木）		
8：30～　9：15	ＪＬ１０４機で大阪から羽田へ	
10：30	羽田発ＰＡ８２８機で帰国	